

「P-1グランプリ」。それはリフォーム実績年間2万件以上を誇るパナソニックエイジフリーの社員が、「プランナー」としての人間力「プランニング力」「プレゼン力」を競い合う、年に1度の社内コンテストだ。2001年から始まり、毎年開催されている。今回はパナソニックエイジフリー東北リフォーム課の住環境プランナー前田光雄さんが手がけた事例を紹介する。

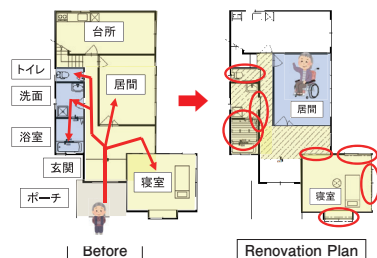


前田さん

90歳のSさん（女性）は息子と二人暮らし。自宅で転倒し、腰椎を圧迫骨折して入院となった。4カ月後に退院する目途が立った時点で、主介護者である息子が「退院後、車いす生活となる母が快適に生活できる環境を整えたい」とケアマネジャーに相談し、前田さんがリフォームを手がけることになった。

Sさんは要介護4で日常生活のほぼ全般にわたり介助が必要。退院後の希望は、極力トイレで排泄すること、安全に外出すること、寝室の寒さ解消などだった。一方、息子がトイレを始め自宅の全ての部屋の段差をなくして母親が安全に車いすで移動できるようにするとともに、夏場は毎日シャワー浴を介助してあげられるようにしたいと話した。

前田さんが家屋内外の環境をアセスメントすると、各部屋の段差を始めトイレの開口が狭く介助スペースがないこと、寝室の窓がアルミサッシと障子戸のため冷気が伝わりやすい室内環境であることなどを確認。各部屋の段差解消も必要だった。また、屋外にも倒壊のリスクがある塀

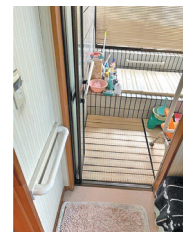


がアルミサッシと障子戸のため冷気が伝わりやすい室内環境であることなどを確認。各部屋の段差解消も必要だった。また、屋外にも倒壊のリスクがある塀

## 『素敵な親子』——たくさんの会話が生まれる住まい

や車いすにとって危険な割れたタイルなど、工事が必要な箇所があることが確認できた。

さらに、もっと重要な気づきがあった。超高齢のSさんの生きがいは、息子や訪問するヘルパー、リハビリスタッフなどの会話であることだ。「単に介助しやすいスペースの確保や段差解消だけではなく、会話が減らないよう、孤立しない生活を続けることも大切にしたい」と考えた前田さんは、短期目標に車いすや歩行器での安全な移動とTさんの介助が可能な環境にすることを掲げ、さらに長期目標には言語機能維持のため



改修後



改修前

めの外出機会を増やすこと、サークル仲間との自宅でのお茶会の再開を設定した。段差をなくして動線を快適にしたほか、トイレや洗面に上吊引き戸を作用して介助スペースを確保、寝室に内窓を付けて断熱するなどどの空間でもTさんとSさんが快適に寄り添えるようにリフォーム。また、スロープや徘徊感知器など福祉用具の活用も提案した。退院後から4カ月後のモニタリングでは、暖かく快適な住まいで親子の対話が増えたことに喜ぶSさん、介助が楽になったと笑顔の息子の姿があった。

前田さんは「動線範囲も最小限の整頓で思い出の品を片付けることなどは取ってしなかった。たくさんのお話が生まれる空間の重要性を学ぶことができた」と総括した。黒田能隆統括部長は、「単に住まいのバリアを解消するだけではなく、日々の生活に着目しご家族との会話や近所様とのつながりにも配慮した良いプラン。何より念入りにアセスメントを行う事で導き出した結果」と評価した。

くらしの中で「できる」ことを増やし、そして、次に「やりたい」ことに向かっていきたいと思います。そんな思いをシンボルマークにしました。パナソニックの介護用品で「心身が前向きに、その先に歩みだす」。私らしくいきいきとしたくらしを実現できる社会を創ることそれが私たちの存在意義です。



## パナソニック エイジフリー

エイジフリーショップ

お問い合わせ先：営業企画部 06-6908-8122

